

ブレインストーミング「英語で授業する / しない」

花見 槇子

Brain Storming “Merits and Demerits of Teaching in English”

HANAMI Makiko

〈Abstract〉

The Center for International Education and Research held the second faculty development meeting following the last year on “To Teach in English.” This year, the first activity was a brain storming on the topic. The participants were divided into four groups with five or six faculty members in each. Everybody freely wrote their pro and con opinions on to teach in English and not to teach in English using Post-it and pasted them on large white papers without questions and arguments.

There are four categories: 1. Opportunities & merits of teaching in English, 2. Demerits & risks of not teaching in English, 3. Demerits & risks of teaching in English and 4. Opportunities and merits of not teaching in English. The contents of each category were classified under subtopics and listed in this report. It is expected that the report stimulates further discussions among the faculty members and leads to the creation of graduate courses taught in English at Mie University.

キーワード：ブレインストーミング、英語で授業する、メリット、デメリット、リスク

はじめに

国際交流センターは昨年度に次いで、「英語に授業する」と題する全学向けFDを11月18日に行った。昨年度は名古屋大学高等教育研究センターの中井俊樹准教授による講演会であったが、今年度はそれを一歩進めて、少人数によるワークショップとして実施した。その第一部として行ったのが以下にまとめるブレインストーミングである。参加者20余名を5, 6人ずつの4グループに分け、グループ毎に模造紙2枚を用いて以下の4分類にしたがって、各自の考えをPost-itに書いては次々と貼って行く。この作業中はグループ内で討論や議論は一切しない。個々人が貼り出した意見等についても一切論評しない。

この間、30～40分、意見が出尽くしたところで、全体を眺めて、全く同じ意見は重ね貼りし、共通性のある意見は一か所にまとめる。そうした作業が終わったところで、グループ毎に結果を発表する。これでブレインストーミングは終了し、第2部へ移ったのだが、わずか20数名とは言っても全学部・研究科からの参加者があり、多様な意見が出てその内容は今後の学内での論議のきっかけ・参考ともなり得るに違いない。そこで以下に結果

を整理して掲載し、最後に私の考察を加えて公開することとする。なお、本稿では、グループ別の差異（ほとんどなかったと言える）にはこだわらず、全体を4区分にまとめた。

	英語で授業する (英語を教授言語とした 授業を開講する)	英語で授業しない (英語を教授言語とした 授業を開講しない)
Opportunity & Merit	1	4
Demerit & Risk	3	2

1. 「英語で授業する」ことによる Opportunity & Merit

4区分の中で最も回答数が多かった。文末の括弧内の数値は同一回答数を意味する。また、共通性、関連性に基づいて回答をグループ化した。

英語に慣れる、motivation が上る等

- ・学生に英語を使わせるきっかけとなる
- ・学生が英語を勉強する motivation になる
- ・英語に接する機会が増える
- ・国際標準言語に学生時代から慣れ親しめる
- ・国際言語としての英語の重要性に気付く
- ・多言語による思考の訓練ができる
- ・英語を使う機会が増える
- ・教員に一定の英語レベルを身につけさせる要因となる
- ・英語に慣れる
- ・最初は苦勞してもすぐ慣れる
- ・英語を使うことへの抵抗が減る
- ・英語に自信はなくてよい
- ・第一歩がなければ第二歩はない
- ・英語を使うことに度胸がつく
- ・学生が海外に目を向けるきっかけになる
- ・英語の専門用語を知ることができる
- ・専門的な内容を英語で学ぶことにより、英語を学ぶ motivation が上がる
- ・高校までの英語教育と異なり自分の興味のあることを通して英語を学べる
- ・英語が好きになる機会が増える
- ・習うより慣れろ

英語力の向上

- ・ 学生の英語力が向上する (2) ・ 先生の英語力が向上する
- ・ 学生が英語に触れる、発信する機会が増加する→英語力の向上
- ・ 英語でのコミュニケーション能力の向上に役立つ (3)
- ・ 国際会議などで自信を持って発言する力を養うことができる
- ・ 海外留学を意識するようになる機会 ・ 海外留学の準備となる
- ・ 留学など海外へ出かけやすい ・ 「点数」のための英語から「伝える」ための英語へ
- ・ 「英語」の理解への変化 (完璧でなくてよい、多様性がある等)
- ・ 教師が実際に使う「活きた」英語表現を学べる
- ・ 様々なレベルの英語にふれ合える→ World Englishes
- ・ ヒヤリング力の up (様々なレベル・バックグラウンドの英語)
- ・ 授業を通じて知識のみならず国際感覚を身につけられる
- ・ ジェスチャー、アイコンタクト等の非言語コミュニケーション・スキル
- ・ 英語の授業を受けて自分に足りない能力を実感できる

人材育成

- ・ 人材育成 ・ 国際社会で活躍出来る学生を育てる
- ・ 英語が出来る学生の方が、研究室に配属された時に役立つ
- ・ 理系の院生としては MUST ・ 研究者としてはいずれ必要となる

教 材

- ・ 英語論文・教科書をそのまま引用して授業ができる
- ・ 海外の教材をそのまま使いやすい ・ より良い教科書が使える

留学生の増加

- ・ 留学生がプログラムに参加しやすい
- ・ 留学生を受け入れやすくなる ・ 留学生が増える (7)
- ・ 日本人学生以外の留学生は授業に参加しやすくなる
- ・ 留学生にとって受講しやすい科目が増える (2)
- ・ 留学生が増えて日本人学生にも刺激になる
- ・ 日本人と留学生がともに学ぶ環境を作り出すことができる (お互いにより刺激になる)
- ・ 留学生と交流しようとする学生が増える
- ・ 留学生の送り出し及び受け入れの促進に役立つ
- ・ 英語圏からの留学生が来やすくなる ・ 英語圏の学生に留学をアピールできる
- ・ 日本語も英語も学びたい留学生により ・ 英語が分かる留学生に短時間で説明できる
- ・ 英語国からの留学生のアルバイトが増える

大学の国際化

- ・ 国際的な場で即発言・活動できる (教員、学生) ・ 国際交流が進む
- ・ 大学の国際化という意識が高まる ・ 外国との密接な関係への理解増
- ・ 国際化に向けて取り組みをしているというアピールが出来る (2)
- ・ 大学の国際化に貢献できる ・ 対外的な対応として必要
- ・ 世界の情報が自然と入ってくる ・ 海外の大学との連携がとりやすい (共同研究)
- ・ 世界と闘える ・ 国際化により大学が活性化する
- ・ 本気でやれば、“売り”に出来る

カリキュラムの国際化、教員評価

- ・ 国籍にかかわらず教員採用が基本となる ・ カリキュラムの多様化 (言語、内容)
- ・ 大学のカリキュラムが国際的標準になっているかを考える機会となる
- ・ 英語の講義に対する手当がインセンティブとなる
- ・ 英語による授業担当者にプラスポイントを与えることは、教員の教育評価の基準に対する考え方を根本的に見直すことにつながる

その他の効果

- ・ 少人数による学生と教員の親密性 ・ 言語の背景にある文化を学べる
- ・ 英語がどのような背景の上に成り立っているかという理解→更なる英語力 up
- ・ 教えることの難しさは、英語だけでなく専門知識にもあることを知る
- ・ なぜ英語で授業を受ける必要があるのかを考えるよい機会となる
- ・ 英語で授業を受けることが将来に役立つにはどうすればよいかを考える機会となる
- ・ 学生が理解しているかどうかを気にしながら授業をするようになる
- ・ 英語以外の言語を学ぶ原動力になる ・ 教員が楽しいし準備が楽である
- ・ ディスカッション、ディベート等日本であまり定着していない要素を取り入れられる
- ・ 英語の練習が同時にできる ・ 英語による物事・タスクの認識法、対応法を学べる
- ・ 外国語で学ぶことのストレスや緊張感がある

その他

- ・ 大学で初めて経験する ・ 無関心な友人の考えを聞いてみることもある
- ・ 英語を用いないことの重要性がわかる ・ 入試の偏差値（少なくとも英語）が上がる
- ・ 津市が少しは国際化する

2. 「英語で授業しない（日本語で授業する）」ことによる Demerit & Risk

英語に慣れることができない

- ・ 英語を使うことへの抵抗が消えない（学生も教員も）
- ・ いつまでたっても第二言語、第三言語の授業に慣れない
- ・ 国外に目を向けるよう学生に伝えてもそれを実感できない
- ・ 学生が海外に目を向けようとする機会がない
- ・ 英語の必要性を学生に伝えられない ・ 学生のモチベーションを下げる
- ・ 英語の重要性に気付かせることができない ・ 実践のチャンスのなさ
- ・ 留学など、積極的な行動を支援する機会を失う ・ 海外に出た時に戸惑う可能性
- ・ 英語が好きになる機会が少ない ・ 学生の劣等感を招く
- ・ いつまでたっても英語に対するコンプレックスがなくなる（先生も学生も）
- ・ 文化の多様性について気付かせにくい
- ・ 言語の背景にある文化に触れる機会が少ない
- ・ 母語の限界について知ることができない

英語が上達しない

- ・国際会議などで自信を持って発言する力を養えない
- ・学生が、英語を理解する・話す必要に迫られた時に対応できる英語力が身につかない
- ・英語圏への留学のハードルが下がる機会が少なくなってしまう
- ・(大学院生等の場合) 国際学会への出席・発表へのハードルが下がる機会が少なくなってしまう ・英語がいつまでも不得意
- ・「生きた英語」「リアルな英語」に触れることができない
- ・教科書通りの英語のみでは国際舞台では通用しない
- ・ジェスチャー、アイコンタクトなどのコミュニケーションスキルを実演できない→例を示すことが出来ない
- ・タスク・シチュエーションに見合う表現や語の選択を説明しにくい
- ・スピード、テンポ、議論への慣れなど
- ・国際競争に対応できる人材が養成できない

留学生の減少

- ・留学生が減る (2) ・留学生が集まりにくい、海外の学生が参加しにくい
- ・海外の留学生 (特に欧米) に目を向けてもらえない ・日本人の学生も減る
- ・外国人留学生が入学するのが困難 ・日本語を理解しない学生を排除することになる
- ・留学生と交流しようとする学生が増えない
- ・英語での授業を増やすだけでは留学生は増加しない (設備などハード面も必要になる)

海外との連携がとりにくい

- ・海外の情報が入りにくい ・英語で書かれた文献の方が多し速い
- ・教育内容が日本でのみ通用するようになりやすい
- ・海外の教育機関との連携がとりにくい
- ・翻訳された教科書のほうが、わかりにくくなっている場合が多い

大学の国際化が進まない

- ・大学の国際競争力が上がらない、もしくは低下する ・教育開国ができない
- ・「国際化」が進まない、もしくは進んでいないという印象を外部に与える
- ・大学としての国際化に遅れる (2) ・国際化の波に乗り遅れる
- ・英語すら話せない→国際化上問題 ・大学として国際的に評価されない
- ・質の良い教員の流出 ・国際化への取り組みに消極的との対外的評価を受ける
- ・国際化を唱えても、一つでも変化をつけないければ、変わっていかない
- ・活動の範囲や情報を共有できる範囲が限定される
- ・教員が英語に触れないことで海外での専門的分野の進みに遅れをとってしまう

英語を使わないことによる言語上の損失

- ・多言語による思考ができない ・言語上の客観性が失われる
- ・一言語に対する他言語による説明・解釈→一対一対応ではない事象の理解の難しさ
- ・(日本語クラスで皆英語が分かる場合) 説明に時間がかかる

その他

- ・キャリアパスが内向きになりやすい ・就業能力の育成に欠陥がある状態が続く
- ・入試の偏差値 (少なくとも英語) が下がる ・再履習生が増える
- ・教員の英語力を磨く機会を設ける必要が生じる→予算的な増加?

3. 「英語で授業する」ことによる Demerit & Risk

学生に敬遠される

- ・学生に不人気 ・学部生には荷が重い ・受験生に敬遠される
- ・英語が苦手な学生は授業を敬遠してしまう ・留年者の増加
- ・英語だけができないという学生を排除することになる
- ・学生に英語のレベルが求められる ・授業についていけない学生
- ・英語 native 教員の授業において理解できない、萎縮する学生が増える可能性がある
- ・英語を将来も必要としない学生には負担 ・英語に嫌悪感を持つ学生の心情

学生の英語力の差

- ・学生の英語力に差がある、理解できない学生が出る
- ・英語が分からない人と分かる人で理解に差ができる
- ・英語力の個人のレベルの違いが激しい
- ・学生の英語力のばらつきにより授業が進めにくい局面が生まれる
- ・学生の英語力・積極性・性格のバラつきがあると授業運営が困難

学生が授業内容を十分理解できない

- ・学生が理解できる学習内容が少なくなる ・学生の授業内容の理解度減少
- ・理解不足の学生が出るかも知れない ・授業内容を誤って理解される可能性
- ・学生の十分な理解が得られるかという不安がある
- ・内容が十分に教育されない可能性あり ・間違った英語に気付かない場合がある
- ・学生に知識が伝わらないかも知れない ・細かいところが理解できない (学生)
- ・うまく聞き取れず理解度が下がる、誤解が生じる
- ・学生の理解が不十分な結果に終わる (2) ・理解度の低下 (日本語での授業に比べて)
- ・学生自身の英語によるコミュニケーション能力をサポートする必要がある

授業レベルやスピードの低下

- ・授業内容のレベルが低下する
- ・英語に慣れないので専門の内容を簡単な英語にしてしまい、結果として授業レベルが下がる ・授業が活発になりにくい
- ・予定通りの進捗にならないかも知れない ・授業のスピード低下

授業準備の負担

- ・教員の授業の準備に時間がかかる (5)
- ・準備に時間と労力がかかる ・教員の授業準備の負担増 (4)
- ・教員の負担 (英語による授業の準備、プレッシャー) が増える

教員の能力

- ・十分な教員が集まらない ・現在の教員では間に合わない
- ・英語で教えることに対する自信のなさが学生に伝わる
- ・出来ない教員に強いる場合のデメリット
- ・教員の英語力 ・教員の英語能力がわかる（ばれる）
- ・（授業中）応対に時間を要することがある
- ・複雑な概念などが説明できない（英語能力に問題）
- ・微妙なニュアンスを英語で表現することが難しい
- ・英語を話す時に詰まる（授業が滞る） ・緊張する
- ・教師が英語を間違えると威厳を失う可能性がある
- ・教員にも英語能力が必要で、出来ない人も多い
- ・全員の教員が出来ることではない（できない人もいる）
- ・教員への英語力向上トレーニングをどうする？

日本語の問題

- ・対応する日本語がわからなくなる ・日本語「訳」の問題を生む
- ・国語力の低下 ・日本文化らしさが伝えにくい
- ・日本語の専門用語の学習機会が減る ・日本の状況を見逃した議論がされやすい
- ・母国語に対する尊敬（正しい日本語が話せない、文化的に問題）
- ・ストレートな表現、eg 敬語がない等→ミスコミュニケーション、アカハラ??

留学生の問題

- ・留学生の日本語学習へのモチベーションがあまり高まらない
- ・留学生受け入れ数が現状通りもしくは減少（増えないこともあるのでは？）
- ・折角日本に留学して英語で（授業を）聞く意味？

その他の諸問題

- ・ 質の保証? 評価方法?
- ・ 評価において、能力の差よりも英語力の差が反映される可能性がある
- ・ 導入を間違えれば、国際性も専門能力も身につかない
- ・ 国際的と言いながら、第二言語を英語と決めてしまっている
- ・ 他の国内の大学との連携がとりにくくなる可能性
- ・ 英語で授業したことが学生の将来に役立つのか未知
- ・ 英語で書かれた教科書は概して値段が高い (学生にとっての負担増)
- ・ 実験実習科目には導入困難 ・ より教育にお金がかかるかも (しれない)
- ・ 学生の英語力の低下

4. 「英語で授業しない (日本語で授業する)」ことによる Opportunity & Merit

(日本人) 学生が理解しやすい

- ・ 理解度が高まる ・ 学生が意見を言いやすい
- ・ 学生の理解が早く、授業が進めやすい ・ 英語よりはたぶんよく理解できる
- ・ 学生が授業の内容の理解に専念できる ・ 学生の授業の理解がスムーズになる
- ・ 言語に惑わされず内容を理解できる
- ・ 日本人学生にとっては、専門知識の理解が、日本語による授業の方がスムーズ
- ・ コミュニケーションが円滑に進む、言葉による誤解は生まれにくい
- ・ 日本語のみの授業: 一定の理解度の確保しやすさ ・ 知識伝達のスピードの速さ

(日本人) 教員が授業しやすい

- ・ 授業準備がしやすい ・ 教師がきちんと説明できる
- ・ 今まで通りなので、レジュメも変えなくてよく、忙しくならない
- ・ 英語の勉強をしなくてもいいので、心にゆとりができる
- ・ 細かいニュアンスを表現できる ・ 用語等の概念が比較的楽に説明できる
- ・ 細かい部分も伝わり易い (英語だと詳しく聞かれると答えられなかったりする)
- ・ 充実した内容で授業を運営することができる ・ 授業の運営法を変えなくてよい
- ・ 楽 easy ・ 母語が日本語の教員にとっては、細かく授業時間の調節がしやすい
- ・ 母国語なので、専門さえできれば教授できる ・ 日本人なら誰でも可
- ・ 少なくとも日本人の先生は全員日本語なら教えられる

今まで通りの良さ

- ・教科書が日本語のものの方が安い場合が多い ・教科書が安価に購入できる
- ・教員に英語力を要求しなくて済む（教員登用）・学生も先生も楽（3）
- ・進度を保てる ・授業の内容のレベルは今まで通り ・活発な議論を促進しやすい

学生のための現状肯定

- ・留学生の日本語学習へのモチベーションが高まる ・公務員試験等への対応
- ・多くの学生が好む ・日本語と英語のとらえ方の違いに気付かせらせる
- ・受験生にとっての心的な負担が少ない→受験生が減少しない？
- ・外国語に興味の無い日本人学生が集まってくる ・再履習生が増えない
- ・他の外国語よりも英語の方が「優れている」といったような危うい印象を与えにくい

日本語・日本文化が学べる

- ・「日本語」を「日本語」で学べる ・日本語力を上げられる
- ・日本の諸事情について理解しやすい ・日本の情緒が入りやすい
- ・日本の文化（表現方法）が学べる（日本語クラス）

その他

- ・質の保証、評価しやすさ ・授業の後、成績評価が楽である
- ・英語で書かれていることがすべてではない ・後から英訳すればよい
- ・高校までに身に付けた英語知識を応用しやすい
- ・一言語に対する多言語による説明・解釈→多様なアスペクトから理解が可能
- ・自動翻訳が進み語学の問題はなくなるので不要に

5. 考察

昨年度のFD講演会も今年度のワークショップも「英語で授業する」という漠然としたタイトルで、対象やレベル（新入生を主な対象とした共通教育レベル、学部専門教育レベル、大学院教育レベル）、分野（文系、社会科学系、理系）などを絞ってはいない。まずは大学教員全体で「英語で授業する」ということを考える端緒として始めたFDであり、ブレ

インストーミングに当たっては、「教員個人の立場と大学としての立場の両面から考えてください」としているため、参加人数に比しても極めて多様な意見が出たと言えるし、それは今回の試みの成果ととらえてよいと思う。大学の将来に関わる諸課題に関して、700名を超える教員間で本音のコミュニケーションが交わされ共有される機会は大学という特殊な日常性の中で限られているからである。

当然のことながら、「英語で授業する」と言っても、全学のすべての授業を英語で行うことを目指すものではない。それどころか、大型予算のついた国際化拠点大学（いわゆるGlobal 13）においても、せいぜい全学の授業の30%程度を英語化することを目指す、と聞く。したがって、こうした目標値を一気呵成に実現しようとするものでもない。さらに文系よりは理系の科目の英語化が意図されており、それも大学院レベルが中心のようである。それは、理系分野において既に地球規模で英語化が進んでおり、学位を取得するために、国際的専門ジャーナルに論文を英語で発表することが制度化されてきて、本学も例外ではないことからわかる。

多数の理系の学科または専門コースのなかで、ひとつでもふたつでも、英語だけで学位が取れるようにできないものか、というのが、現実的な事の始めなのである。だが無論、そこに限定しなければならないわけではない。すべて右へならえではなく、大学独自の路線を歩むこともありだと思われる。それがGlobal 13に選ばれなかった大学の特権かもしれない。ただし、「教育の国際化」に目を向けない大学は早晚取り残されざるを得ないだろう。

以下、ブレインストーミングで明らかになった意見を概観してみよう。

1) 英語で授業することのメリットとして、「学生も教員も英語に慣れる、英語力が向上する」、といった意見が多数あった。これは逆に、英語で授業しないことのデメリットとして、「英語に慣れない、英語が上達しない」という意見により補強される。「英語に慣れる、英語が上達する」等の表現は、英語という言語を操ることに関して、心理的な面をも含み、コミュニケーション力のレベルとして相当広範囲のことを示唆していると考えられる。

2) 英語で授業することのメリットとして、次に多いのが「留学生の増加」への期待である。これは、英語で授業しなければ「留学生は減少する」との悲観論にも対応する。英語で授業すればなぜ留学生が増えると考えられるのか。それは、教育言語としての英語が、英語圏諸国を超えて世界的に広まりつつあるからである。本学の留学生の中で10年以上に渡って常に過半数を占めてきた中国人留学生を例にすると、10年前には、英語の出来ない学生、

英語ができないから日本に留学した学生が相当数いた。今は違う。日本語を学び、日本語で学びながら、英語力の必要性も承知している学生が多い。英語で授業すると留学生の日本語学習へのモチベーションが下がり、英語で授業しないと逆にモチベーションが上がるとの指摘があったが、この場合のモチベーションとは、「積極的な動機」を意味するものだろうか。大学の教育がどこまで英語化されようとも、日本文学を筆頭として、日本語で学ぶべき分野はなくなる。ただ自然科学の世界におけるコミュニケーションが怒涛の勢いで英語中心になりつつある現状では、多くの留学生のモチベーションが日本語よりは英語に向かうのは無理ないことかもしれない。

3) 英語で授業することは「大学の国際化」につながり、しなければ「国際化が進まない」との意見が多数ある。確かに今日、「大学の国際化」の基本的要件として「教育の英語化」が当然視されている。その中で、「国際的と言いながら第二言語を英語と決めてしまっている」あるいは「英語で書かれていることがすべてではない」との指摘があった。では、英語を第二言語であると一体誰が「決めた」のだろうか？これは、例えば三重大が、数ある外国語の中から主体的に英語を選び取ったというようなものではないだろう。世界に野火のごとく広がる英語の現状を「受け入れた」に過ぎない。「国際化」ということは、本来英語以外の言語を排除するものではないし、実際排除してはいない。日本語による国際交流だってちゃんとある。ただそれが地球全体規模で広がる可能性が乏しいということだ。

4) 英語で授業することのデメリットに移ろう。まず、「学生に不人気」「学生の英語力に差がある」「学生が授業内容を十分に理解できない」「授業内容のレベルが低下する」「授業の進度が遅れる」等々が指摘された。この場合、「学生」とは、学部生、院生の別なく、現状での「日本人学生」を指すものと思われる。平均的な三重大生像を念頭において考えた場合当然上げられるべき深刻な問題である。現在、学部新入生全員に対しては、共通教育においてTOEICに基づく英語教育が課されている。その合格ラインは400点とのことであるが、このラインをクリアしても、いや基礎英語科目が免除される600点を取得しても、英語による専門科目の受講はむずかしいだろう。国際交流センターが開講している「英語による国際教育科目」においても、こうした日本人学生たちのコミュニケーション力は、留学生たちと比べて、総じて低いと言わねばならない。中等教育における英語教育が現状のままである限り、学部生への英語基礎教育はもっと効果的なものにならなければならない。しかし、能力や意欲の乏しい学生を含めて全新入生を対象とする限り、それは無理だろう。折角英語による専門コースを設けても、留学生ばかりが受講するのでは意味がない。

これは専門コース設計と並んで解決策を見出すべき課題である。

5) 英語で授業することのデメリットとして次に指摘されるのが、教員側の問題である。端的に言って「教員の負担増」である。「授業の準備に時間がかかる」「複雑な概念などを説明できない」等から始まって「英語能力が(学生に) ばれる」「威厳を失う」等々。また、「全員の教員ができることではない」ということもその通りであり、そうである必要もない。さらに、昨年度、名古屋大学の中井准教授による講演では、英語で授業する教員の心得としてまず挙げられたことは「完璧な英語を目指さない」ということであった。(中井 2008) 英語が世界共通語に近くなりつつある今日、それはもはや English ではなく、World Englishes であるとの指摘もある。また、今年度の FD のワークショップでは、a. 授業全体をあらかじめしっかり設計する、b. 従来の講義型から active learning へ転換することなどが提案された。確かに準備にある程度の時間を要し、教員の負担増とも言える。だが最初の壁を乗り越えれば、授業効果は伝統的な日本語での講義を超える可能性もある。その価値を認めるならば、大学として担当教員に何らかのインセンティブを考慮し、教育評価においてプラスすることもあってよいのではないか。

6) 大学として「グローバルに活躍できる人材の育成」ということを掲げるのならば、専門分野における能力と国際語である英語によるコミュニケーション力を兼ね備えた人材を育てるための具体的プランが欠かせない。これは、全学生をその方向に向けて教育することを意味するのではない。現実的に考えて、まずは少数の、意欲と能力のある学生(むろん留学生も含む)に特化することだ。全学で50人程度から始めてはどうだろう。共通教育における英語教育、海外語学研修プログラム、国際交流センターの「英語による国際教育科目」、国際インターンシップ、学部・大学院における英語での専門教育、交換留学、3大学国際ジョイント・セミナー&シンポジウム等々を段階的効率的に履修できるよう、全学的な調整を図る。最小限この程度の努力で、ブレインストーミングにおいても「うまくやれば大学の売りにできる」と判断されたような「看板」が作れる。

7) だが、学部・研究科間の高い垣根を越えて事を進めるためには、全学を牽引する強力なリーダーシップが必要である。現状のままでは、三重大学においては将来に渡って何事も起こらないのではないだろうか。二年に渡って試みた FD も今後どのように進めるかは茫漠としている。具体的な目標やニーズが今のところ見えてこない。高等教育の創造・開発を考えるあらゆる場において、「教育の国際化」が常に意識化されるようにならなければ

ば先へ進むことはできない。「英語で授業する」ことが、少なくとも建前として、肯定的に評価されたことを前提に、大学の新たな一歩が踏み出されることを切に希望する。

参考文献

中井俊樹編（2008）『大学教員のための教室英語表現 300』アルク

中井俊樹編（2009）『大学生のための教室英語表現 300』アルク